論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名	コウ ビサン HUANG Weishan		授与番号 甲 第 1366 号
学 位 の 種 類	博士(文学)	授与年月日	2019 年 9 月 25 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者(学位規則第 4 条第 1 項)		
博士論文の題名	十七世紀渡日明知識人研究 ―中日思想交流を中心に―		
審 査 委 員	(主査) 桂島 宣弘 (立命館大学文学部教授)	中村 春作 (元広島大学教授)	
	大田 壮一郎 (立命館大学文学部准教授)		

論文内容の要旨

本論文は、17世紀中葉、明清交替期の渡日明知識人をめぐる、中日知識人間の思想交流を検討し、それが東アジア思想空間にどのような影響・波紋をもたらしたのかを思想史的に検討したものである。具体的には、第一部(第一章～第四章)で渡日儒者朱舜水を、第二部(第五章～第八章)では渡日僧隠元などの黄檗僧を中心に検討している。

序論では、日本及び中国における先行研究が検討され、それらが個別の朱舜水・隠元研究を蓄積させてきたとはいえ、かれらを取り巻く思想圏・ネットワークに注目して、思想圏全体の変容に迫ることが不十分であったこと、また近年当該期前後の海域史研究が飛躍的に進展しているにも拘わらず、思想面での検討が弱かったことがのべられ、本論文はこれらの面を刷新するものであるとのべられている。

以下は第一部である。第一章「朱舜水の『海上経営』と明清交替期の東アジア秩序」では、明清交替を発端とした朱舜水の亡命活動とその来日・帰化経歴を検討している。舟山―厦門―長崎―会安を拠点として行われた舜水の「海上経営」経歴をたどることで、その明遺民としての矜持、南明政権への期待、安南での失望、日本への期待という華夷意識の変遷が検討され、そうした変遷が、ついに朱舜水をして渡日に至らしめたと結論づけられている。

第二章「朱舜水の思想的特質――明末清初期の思想と関連して」では、朱舜水の思想に明末清初期における「経世致用」を重視する「実学」思潮が深く刻印されていることが示され、とりわけ明清交替を目撃することで、明儒学の形而上学的哲理(心学)に「偏重」した傾向こそが明滅亡の背景であると捉えられたことで、一層その特色が強まったとされている。こうした「実学」的特質は、清初期の黄宗羲・顧炎武・王夫之らとも共通した思想的特質であるとされ、朱舜水もまたその思想的経緯、心学から考証学に向かう明清儒学の趨勢に影響された存在であったとされている。

第三章「朱舜水と日本知識人の交流――安東省菴・小宅処斎を中心に」では、朱舜水の長崎滞在期における安東省菴(松永尺五門)と小宅処斎(水戸藩史局館員)との思想交流が検討されている。総じて日本の状況に理解を示し、寺檀体制下の現状に見合った儒学実践を説く朱舜水とは異なって、「朱陸異同問題」、仏教批判などにおいては、日本側

論文内容の要旨	儒者の方が弁別的立場を示したこと、また明清交替の体験者朱舜水と出会うことで清夷狄観が日本側儒者の関心をも惹起したこと、日本の中華の可能性も議論の俎上に挙がったことなどが検討されている。 第四章「水戸藩の儒学実践と朱舜水に関する一考察」では、水戸藩招聘期を対象として、朱舜水の役割について検討している。朱舜水は明儒という身分を強く自覚しつつ、水戸藩の文教事業(『大日本史』編纂と学校制度など)、聖廟建立の計画、『朱子家礼』などの儒礼実践に深く関わったとされる。しかしながら、日本の状況に見合った制度を求める朱舜水の議論に見られるように、それらの言説の多くは実現に至らなかったものも多く、なお慎重な評価が必要であると結論づけられている。 以下は第二部である。第五章「隠元渡日と近世黄檗宗の展開」では、隠元の渡日経過が、明清交替や長崎唐僧との関連で検討されている。従来は、隠元の渡日理由について、鄭氏政権の「日本乞師」や「反清復明」運動との関連で説かれることが多かったが、近世に入って衰退しつつあったと捉えられた日本の禅林界、とりわけ臨済禅の状況を目撃して、「日本弘法」の使命感を有して活動したことが渡日の理由であったとされている。華夷弁別に対して距離を置いていたこと、臨済宗と曹洞宗の『五灯厳統』をめぐる争いの中にあった隠元が、その日本での出版を実現させたことなども、その証左として挙げられている。 第六章「明末清初期の仏教における儒仏一致・禅浄双修――近世黄檗宗の思想土台との関係より」では、明風禅の思想的特質として「儒仏一致」と「禅浄双修」が取り上げられ、隠元来日、黄檗禅の渡来によって、これらが日本の禅林にももたらされることとなり、臨済禅に新風を送ったとされている。ここでは、隠元門下の渡日僧の独立性易の禅思想も取り上げられ、こうした黄檗禅がやがて白隠慧鶴らにも影響を与えたことが示唆されている。 第七章「独立性易における『華夷の弁別』」では、もと儒医・薬商身分であった独立性易にあっては、隠元に帰依して黄檗僧へと転換した後にも「華夷の弁別」が見られるものの、朱舜水ほど一貫したものではなかったと説く。そもそも隠元とは異なって、日本滞在の「方便」として帰依した可能性もある独立の場合は、儒仏の間にあってこうした動揺を示しており、明清交替後の華夷観にも多様性や幅があることが示されている。 第八章「隠元・近世黄檗宗に対する日本側の反響――批判者としての向井元升と無著道忠」では、隠元渡日や黄檗宗の展開に対する批判的議論を取り上げ、その波紋は一方的な影響関係だけではすまされないことを論じている。長崎住民であり伊勢神道の影響を受けていた元升は、『知恥篇』において、排仏論の視点からの批判に加え、文化的影響を警戒して黄檗禅を激しく批判し、「日本神国」論を展開した。また、臨済宗妙心寺派の僧道忠は『黄檗外記』において、隠元の人格攻撃を行っている。これらからは、和・唐という区分からの反発には収まらない、党派的反発も含まれており、そこに明清交替がもたらした波紋・葛藤の複雑な様相も窺えると結論づけられている。 最後の結論部では、華夷観をめぐる生々しい認識、明儒学・仏教の新思想の弘通という「普遍的使命」、日中の思想・文化状況の相異と相克など、さまざまな思想変容が明清交替によってもたらされたことがのべられ、今後の課題が整理されて論文が結ばれている。
論文審	明清交替期に渡日した知識人が近世日本思想にどのような影響を与えたのかを本格的に取り上げた本論文の意義はきわめて大きい。とりわけ次の五点において本論文は、思想史研究に新しい地平を切り開くものと評価できる。

査の結果の要旨	第一に、トランスナショナルな思想史研究の方法論に立脚した、東アジアの思想空間全体を俯瞰した研究となっていることである。すなわち、近年確かに思想の東アジア的研究は飛躍的に増大したものの、未だ比較に止まるものも多く、個別の特色の摘出から個別文化論、ナショナルヒストリーに収斂する傾向も見られる。本論文は日中の儒学・仏教思想界全体に目配りしつつ、明清交替という衝撃・事件が国境を超えてどのような共時的変移をもたらすのかを本格的に論じることで、トランスナショナルに共有された思想構造を見通すものとなっている。 第二に、とりわけ儒学・仏教の両面にわたって、渡日知識人を取り上げ検討したことである。この作業は容易なものではなく、申請者の労苦は並大抵のものではなかったと推察される。儒仏一致も指摘されている当該期思想の特徴に鑑みるならば、本論文のような構成は当然要請されるものといえるが、それは膨大な史料蒐集と検証を要請するもので、申請者がそのことに果敢に挑んだ姿勢は高く評価される。 第三に、朱舜水研究においては安南（ベトナム）まで射程に入れて思想変容を追跡した点、水戸藩活動期の影響について再考を促した点、また隠元研究においては臨済禅と曹洞禅の確執からその渡日の意義を再検討した点、宗派発展史に収斂されない論点を示した点など、個別研究として見た場合にも傾聴すべき論点を示すものとなっている。 第四に、近年、長崎・上海・福建・台湾・安南などの海域史研究が著しく進展しているが、思想史的なアプローチはそれに比するならばやや遅れていた面は否定できない。本論文はそうした現状に一石を投じるものとなっている。とりわけ、長崎在住の唐僧・渡来人が 17～18 世紀の思想空間に占めていた意義に注意を喚起した点は注目に値する。 第五に、朱舜水や隠元に止まらず、あまり焦点が当てられてこなかった安東省菴、小宅処斎、独立性易、向井元升、無著道忠などを取り上げ、苦心して蒐集した史料も駆使しつつ、その思想分析を行った点も評価される。長らくほとんど取り上げられてこなかった人物が、明清交替期の思想空間という舞台で鮮やかに浮かび上がっていることは新鮮なものであった。 以上の達成に加え、他に評価できるものとしては以下の点を挙げることができる。①中国・台湾における海域史に関わる近年の研究が詳細に検討され、その成果が取り入れられている点も、留学生ならではのものとして評価できる（徐興慶ら）。トランスナショナルな研究である以上、今後の国際共同研究にも道を開く研究となっている。②華夷観については本論文の一貫した問題関心となっているが、明清交替に伴う自他認識の変容について、これまでの山崎闇斎学派・山鹿素行・熊沢蕃山らの言説を超え出た、直接的人物交流に基づく生々しい認識に迫った点も評価されよう。③本論文では、近世日本文学研究も重要な導きとなっている（石崎又蔵、中村幸彦、中野三敏ら）。これと並んで近年の唐語や通詞の研究、「訓読」ネットワーク研究などにも十分に目配りされており、こうした学際性も本論文の視野の広さとして評価できる。 本論文の問題点として指摘されたことは以下のとおりである。第一に朱舜水や隠元・黄檗宗の渡来については、とりわけ後者については、何といっても思想に止まらない文化的影響（絵画、茶道、文学、唐語、習俗などの明風文化）が指摘されてきた。本論文では、そのような文化的影響については、あまり言及されていない。明清交替後の儒学・仏教に絡む明風文化の衝撃にも目配りするならば、その影響はより重層的に論じられたのではないか。第二

	に、思想史が中軸とはいいつつも、明末清初期の儒学・仏教の日中の動静の理解にやや不十分な点が見られることである。明・清期中国における心学から考証学への思想趨勢、日本における 17～18 世紀の朱子学の動静、禅浄兼学・儒仏一致の傾向などについては本論文でも指摘されているものの、各論として見た場合には思想史研究においてもそれぞれについて重厚な成果が蓄積されている。それらを精査しながら朱舜水・隠元らの思想の特質が論じられるならば、より精緻な思想研究となったと思われる。第三に、儒者と仏僧の華夷論が比較されているものの、元来が儒学的世界観ともいえる華夷論で儒仏者を比較することは、明清交替期とはいえやはり無理があったのではないか。むしろ明清交替という激震に、儒仏者のそれぞれがどのように向き合ったのかを整理した上で、朱舜水・隠元らが果たした役割を分析するべきではなかったか。 以上の問題点・課題が残るものの、本論文はまさしく申請者が一生取り組みうる壮大なテーマの現段階での一つの集約ともいえるもので、方法論や実証性の面でも、きわめて高いレベルにある論文と評価できる。日本語の完成度も高く、中国語を母語とする留学生の論文としては大変優れたものといわなければならない。 以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。
試験または学力確認の結果の要旨	本論文の公開審査は 2019 年 7 月 5 日（金）16 時から 18 時まで、末川会館第二会議室で行われた。審査委員会は、本論文がきわめて優秀なもので、十分な独創性・体系性、高い水準の学術的価値をもつものとの結論に至った。本論文の叙述、引用史料および提出された英文要旨から、中国語を母語とする申請者の中国語（古文）・日本語（現代語・江戸語・古文書）・英語の卓越した水準の力量も窺える。審査委員会はまた、本論文の主要分野である日本近世思想史および東アジア近世思想史・東アジア国際関係史について、申請者の歴史的事項に関わる知識、主要な研究とその史学史的意義について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。 加えて、申請者は、本学大学院文学研究科日本史学専修博士課程後期課程の在籍期間中に発表した査読付を含む五本の学術論文、数多くの国際学会・研究会での報告などで、すでに東アジアの学界において若手研究者としての地位を確立している。 以上から、審査委員会は申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。したがって、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、博士（文学　立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。